

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24600016

研究課題名(和文)「絵本共有」の基礎・実践統合研究 子ども・子育て多文化共生環境づくりとの連携

研究課題名(英文) Basic and practical research for sharing picture book culture among areas with a high density of foreigners: From a stand point of multicultural enrichment for children rearing environments.

研究代表者

竹下 秀子 (Takeshita, Hideko)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：90179630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：滋賀県東北部の外国人集住地域の保育所に在籍する複数言語環境児を対象に絵本共有の発達基盤に関する基礎研究を実施するとともに、家庭および保育所、地域の子育て環境整備のための基礎資料を得ることを目的とした。就学前に至るまで、保育中の読み聞かせや朝夕の自由遊び中の絵本読みに複数言語環境児も意欲的に参加し、複数言語環境児から日本語母語児への読み聞かせも発生した。読み聞かせのストーリーへの興味の強さや、それを題材にした描画表現に内容に即した3次元構造が見られる点においても、両者が共通して享受できる文化財としての役割を日本語絵本が果たすことが明らかになった。当該母語を理解する保育者配置の必要性も示唆された。

研究成果の概要(英文)：Children in a multilingual environment and in receipt of childcare at a daycare center were visited and observed over 4 years. From the utterance records collected there and the S-S Test for language-retarded children, developed by the National Rehabilitation Center, it was revealed that children growing up in a multilingual environment exhibit slower vocabulary and syntactic development in Japanese and that this continues past the age of four and a half years. According to results from the native language vocabulary survey, circumstances of acquisition vary from child to child, with some showing signs of double limitation. However, the high-quality educational atmosphere, resulting from close contact with care givers and active peer exchange with picture books, is expected to compensate for the potential weakness in multilingual children.

研究分野：発達心理学

キーワード：多文化共生 多文化保育 絵本読み聞かせ 日本語指導 母語指導 滋賀県 外国籍住民 子育て環境

1. 研究開始当初の背景

多文化共生社会への対応は、「知識基盤社会」「リスク・格差社会」「成熟した市民社会」への対応とともに 21 世紀国際社会での喫緊の課題である(日本学術会議, 2010)。わが国でも一部には熱心な議論があるが、一般には未だ問題の共有にさえ進みにくい現状がある。しかし、ますますグローバル化する世界において、社会、政治、経済、教育、福祉、医療、と生活のあらゆる側面での多文化共生の体制整備と実践的問題解決が図られねばならない。また、多文化共生の課題は、現実社会ではリスク・格差の問題や、健全普遍的シティズンシップの探求と深くかかわっており、21 世紀のわが国の子どもの成育環境の整備において「多文化な子どもの子育て」は最重要な視点の一つである。本研究にかかわっては、国際的には多文化社会先進国であるカナダやオーストラリアなどを中心に進められてきた、教育制度、教育内容・カリキュラム研究など教育学分野における先進例が参考になる。心理学分野においても、これまで多く指摘されてきた多文化環境で育つことのデメリットではなく、メリット、積極面を創出し、評価する研究を進めていこうという機運があり、2012 年 2 月に開催された SRCD (子ども発達学会) 課題別会議のテーマとされた。いずれにしても、多文化共生社会研究は学際的取り組みと多様な発想、方法論が求められており、多文化社会にさらに本格的に足を踏み入れようとするわが国における基礎研究、実践研究を推進する意義は大きい。

2. 研究の目的

滋賀県東北部の外国籍居住者を主たる対象に、胎児期からの絵本読み聞かせプロジェクトを推進し、子どもの発達に関する基礎研究を実施するとともに、家庭および保育所、地域の子育て環境整備のための基礎資料を得ることを目的とした。研究期間を通じて、言語獲得期の「多文化な子ども」を対象とした保育所での遊び、絵本読み聞かせ場面での発話、ジェスチャー、表情変化、対人行動にかかわる発達の変化を検出するための自然観察を継続し、この地域における「多文化な子ども」の日本語と母語の習得状況を把握するため、観察中のビデオ記録から、自然な発声・発話を可能な限り抽出し、語彙の増加、発話中の語数、動詞・助詞・助動詞の出現状況などを分析した。さらに、日本語および母語の獲得状況の調査や絵本を題材にした描画における表現内容の分析を実施した。

3. 研究の方法

滋賀県の外国人集住地区にある保育所で、複数言語環境児が在籍児の 20%以上を占める保育所に研究協力を依頼した。保護者の同意を得て、2013 年 2 月の 1 歳児クラス(年度当初に 2 歳未満が在籍)から開始した保育

観察を中心に絵本共有の発達基盤にかかわる資料を集積した。

(1) 保育観察

焦点児 3 名の所属するクラスで、観察者 2 名が、①8 時 40 分から 10 時 10 分、②10 時から 11 時 30 分、③15 時 20 分から 16 時 50 分の時間帯で、1 回 1 時間~1 時間半、1 月 3~4 回通常保育時間にクラスに入り、給食と午睡を除いた、「朝の自由遊び」「朝の挨拶」「体操」「設定保育」「午前のおやつ」「午後のおやつ」「帰りの挨拶」「自由遊び」「絵本読み聞かせ」など、保育活動中の子どもの姿をまんべんなく観察し、子どもの言動をビデオカメラで記録した。3 名の焦点児はともに 2012 年 4 月に協力保育所の 1 歳クラスに入園した。

(2) 国リハ式<S-S 法>言語発達遅滞検査

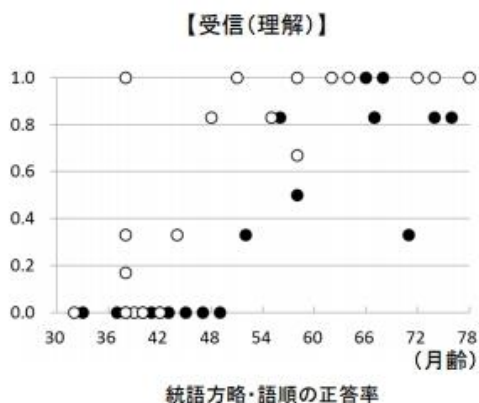
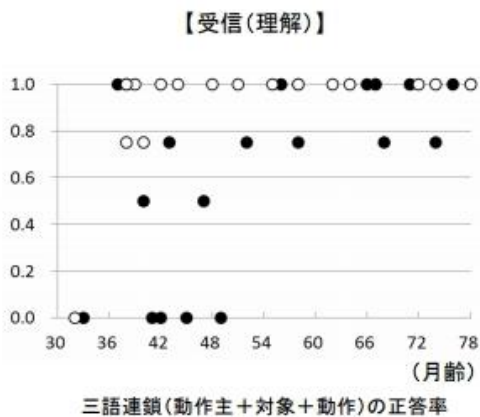
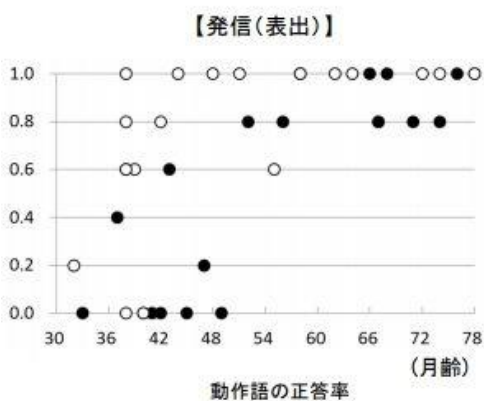
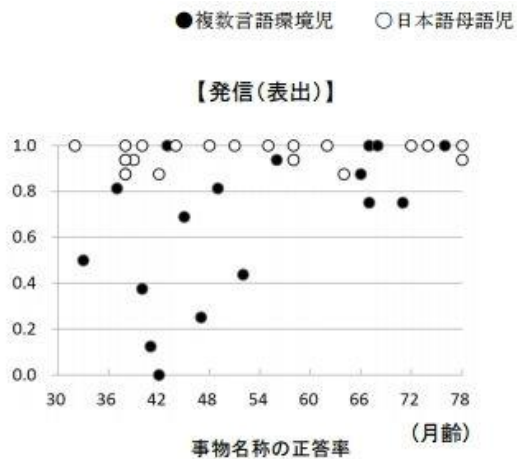
「事物名称」「動作語」「大小および色」の語彙検査と、「語連鎖・動詞句」「語連鎖・名詞句」「語連鎖・統語方略」の語連鎖検査の順で構成される。検査者が絵カードを机に置き、その発話を聞いた参加児が該当するカードを示す【受信(理解)】と、検査者が提示したカードを見て、参加児が発話する【発信(表出)】をビデオカメラで記録し、分析した。実施期間は 2013 年 11 月から 12 月、参加児は複数言語環境児 19 名(2 歳児クラス: 6 名, 3 歳児クラス: 4 名, 4 歳児クラス: 5 名, 5 歳児クラス: 4 名)と日本語母語児 21 名(2 歳児クラス: 9 名, 3 歳児クラス: 4 名, 4 歳児クラス: 4 名, 5 歳児クラス: 4 名)だった。

(3) 母語語彙検査

愛知県プレススクールマニュアル(愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室, 2009)を参考に母語語彙項目を選定し、複数言語環境の焦点児を対象に 2014 年 11 月(各, 3 歳 7 か月, 3 歳 4 か月, 3 歳 5 か月)に、同マニュアルの資料集「2 語彙調査」から 3 歳児では難しいと思われるものを除いた母語語彙の習得状況を調べた。対象となった語彙は、「保育所や学校で使う物」「持ち物」「身につける物」「生き物」「食べ物」「食器」「乗り物・交通」「天気・自然」「場所」「動詞」「感情」「家族・人物」「形容詞」「体の部位」「体調」「色」「位置」「形」「数を数える」で構成した 84 語だった。焦点児に絵カードを示し、「O que é isso? (これは何でしょう)」もしくは「Onde é aqui? (ここはどこでしょう)」等の質問をし、応答を記録した。

4. 研究成果

(1) 焦点児は、日本語母語児に比べて日本語習得が一貫して不十分だったが、在籍クラスの前者とのかかわりを経ながら、コミュニケーションの質を高めていった。一人は 3 歳児クラスになったころから、整列から外れる、席に座らない、片づけをしないなど、保育者の指示に従えず、おもちゃを蹴飛ばしたりはするものの、担任が丁寧に接することで立ち直



ることが多くなってきた。他児が本児の制作した積木の一部を積み直したことに對して「○君がしてくれたよ」と発話し、更には積木を他児と分け合いながら率先して片づけを行い、最後には自分の前にあった積木を他児に触らせようとしないお友だちに対して穏やかに説得する場面も見られるようになった。他の一人は歌や踊りを好み、在籍クラスの中でも上手にパフォーマンスできる。母語の発話は複数言語環境児に中で一番多く、抗議をする時にしばしば母語を使用する。その意味がわからない他児は、場違いなところでそのことばを本児に投げかけたり、本児の日本語の発音の不適を指摘したりしたことに戸惑う様子があった。もう一人は発話が少なかった。他方、何事にも積極的に、年少クラスでは、無言や力づくで他児のおもちゃを取りあげ、しばしばトラブルになった。年長クラスになるころから新入園の他児の手を繋いでリードする、人形を渡していっしょに遊ぼうとするなど、ことばでの働きかけは少ないが積極的にコミュニケーションをとる姿が見られた。焦点児はいずれも、在籍クラスでの日本語による絵本読み聞かせに参加したほか、朝の会前や夕方の自由遊びにおいて絵本を積極的に手にとった。ただし、日本語母語児が他児との共有を盛んにするようになったころにそのグループの中にも含まれることは少なかった。他方、日本語母語児を相手に読み聞かせごっこをするなどの姿が見られ、さらにクラスで読み聞かせのあった絵本を題材とした描画の表現にも日本語母語児と同様の3次元表現が含まれるなど、情景理解の共有の深さが示唆された。

(2)焦点児の1歳児クラスから3歳児クラス在籍期間の保育観察によると、複数言語環境児は日本語母語児に比べると、二語文・三語以上文の増加が遅く、3歳前半の「述語」使用の割合も日本語母語児に比べて少なかった。遅れていた。国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査の結果からは、語彙検査では4歳半以降日本語母語児と複数言語環境児の差が小さくなるが、語連鎖や統語方略が複雑になると差が生じてきた(左図)。

(3)焦点児の一人は「保育所職員がポルトガル語で話しても、保護者が日本語で答える」ことがよくあり、3歳時点では、84語中11語を日本語で答え、1語を日本語とポルトガル語を混合したコードミキシングで答えた。他の一人の家庭内言語は母語であり、62語が正答だった。日本語で答えたのは2語、混合が「fazendo そうじ」の1語だった。さらに一人の家庭内言語も母語だったが、正答が30語と少なかった。5歳時点では、焦点児同士、他の同一母語児との母語会話が増えた。新たに配置された母語話者の保育者との会話を好む様子も見られた。

研究期間を通じて、焦点児には保育中の読み聞かせや朝夕の自由遊び中の絵本読みに

積極的にかかわる姿が育まれており、5歳時点では、ひらがなとカタカナの習得も進んでいる。外国児母語児の読み聞かせを日本語母語時が受ける場面さえあり、両者が共通に享受できる文化財としての役割を日本語絵本が果たす可能性が示唆された。他方、母語の外国語が共通する子ども同士の当該母語による会話も4歳児クラスから頻繁に発生している。当該母語を理解する保育者を配置して、子どもの気持ちを精細に聞き取りながら、絵本共有への支援を進める必要もあるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- 平野知見・鈴木祥子・竹下秀子. (2012). 「多文化な子ども」の「気になる姿」は保育所所でどう捉えているか—滋賀県内保育所所を対象とした多文化保育の実態調査から. 人間文化, 32, 52-59.
- 鈴木祥子・平野知見・竹下秀子. (2013). 就学前保育における日本語指導と母語指導—滋賀県内保育所所を対象とした多文化保育の実態調査から. 人間文化, 33, 18-25.
- 鈴木祥子・平野知見・竹下秀子. (2012). ブラジル人託児所およびブラジル人学校での保育—滋賀県内保育所所を対象とした多文化保育の実態調査から. 人間文化, 32, 60-67.
- 竹下秀子. (2015). 種, 社会文化を越えて育つ子どもの発達. 乳幼児医学・心理学研究, 24, 3-12.

[学会発表] (計 9 件)

- 鈴木祥子・竹下秀子. (2013) 複数言語環境で育つ子どもの日本語習得—保育所 1~2歳児クラスでの行動観察より. 日本子ども学会第 10 回学術集会, 岡山県立大学.
- 鈴木祥子・竹下秀子. (2013). Vocabulary acquisition in foreign children—外国人児童生徒対象の 100 問語彙テストより. 全国語学教育学会第 39 回年次国際大会, 神戸国際会議場.
- 鈴木祥子・竹下秀子. (2014). 複数言語環境で育つ子どもの他児とのかかわり—保育所 1~2 歳児クラスでの行動観察より. 日本発達心理学会第 25 回大会, 京都大学.
- 鈴木祥子・竹下秀子. (2014). 複数言語環境で育つ子どもの日本語習得—国リハ式<S—S 法>言語発達遅滞検査より. 日本子ども学会第 11 回学術集会, 白百合女子大学.
- 鈴木祥子. (2014). 複数言語環境で育つ子どもの日本語習得と保育—滋賀県外国人集住地域認可保育所在籍児の実状. 第 24 回日本乳幼児・医学心理学会, 滋賀県立大学.
- 鈴木祥子・竹下秀子. (2015). 複数言語環境で育つ子どもの他児とのかかわり—保育

所 3 歳児クラスでの行動観察より. 日本発達心理学会第 26 回大会, 東京大学.

鈴木祥子・竹下秀子. (2015). 複数言語環境児の日本語習得—外国人集住地域保育所の 2~3 歳クラスでの保育観察から. 日本発達心理学会第 27 回大会, 北海道大学.

竹下秀子. (2014). 種, 社会文化を越えて育つ子どもの発達. 第 24 回日本乳幼児医学・心理学会, 滋賀県立大学. (招待講演)

竹下秀子. (2015). 母子コミュニケーションの比較発達と多文化保育. 第 7 回多文化共生フォーラム, 東京学芸大学. (招待講演)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹下 秀子 (TAKESHITA, Hideko)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号: 90179630

(2)研究分担者

佐々木 一泰 (SASAKI, Kunihiro)
滋賀県立大・人間文化学部・講師
研究者番号: 70433240

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

鈴木 祥子 (SUZUKI, Shoko)
認定特定非営利活動法人 NOP ぼぼハウス